

# 英語コロケーション辞典から見えるジェンダー観

森住 史

## 1. はじめに

英語学習者が使用する辞典は、英和・和英辞典、英英辞典にとどまらない。「強い雨」は strong rain ではなく heavy rain である、「お手洗いをお借りします」は May I borrow the bathroom? ではなく May I use the bathroom? である、ということを知って、よりネイティブらしく書きたい、話したい、という思いを抱く学習者は、英語コロケーションの辞典にも手を伸ばすことがあるだろう。そして、規範主義に則って書かれた辞典に頼る学習者は、「これが正しい英語なのだ」「これが自然な英語の表現なのだ」と信じることになる。しかし、その際に、「自然な英語」の例として提示された、特定のコロケーションに含まれた英語話者の価値観や社会観まで、その言語に内包された「自然なもの」として疑問をもたずに受け入れてしまうかもしれない。自分のネイティブ言語以外の言語に触れることは、メタ言語的視点や知識を持つための良い機会でもあることを考えると、これはもったいない、あるいは残念なことでもあるとも言える。

本稿では、辞典の権威と規範主義について概観したのち、次の2つの課題に取り組む。1つ目は、womanやman、wife やhusbandといったジェンダーが関係する英語表現に、どのような単語がコロケートするものとして特徴的に例示されているのか。2つ目は、その特徴的なコロケーションから、どのような英語社会・英語文化のジェンダー観が見えてくるのか。最後に、学習者がそれらの表現を目にした時に、言語を批判的に捉えるための教材としてコロケーション辞典を見なおす可能性についても言及する。

## 2. 辞書の権威と規範主義

Graddol, Leith and Swan (2006, pp.83-84) によれば、言語を標準化するに

は、まず選択 (selection) をし、それを練り上げ (elaboration)、コード化 (codification) したのちに、全域に導入する (implementation) という、4つの重要なプロセスがある。辞典はその3番目のプロセス、コード化に寄与する。辞典や文法書に載せられている綴りや定義、使い方が「正しい」ものと認知されて、その言語を使う人たちの間に広がり共有されることで、標準化が進み、普及するのである。

英語において標準化が一気に進んだのは18世紀で、Milroy and Milroy (1991) は、Dr. Johnsonの*Dictionary* (1755)、Bishop Lowth (1762) や Lindley Murray (1795) の文法書による英語のコード化がそれに大きく貢献したと指摘する。そして、上記のような辞典や文法書が、すでに一般的になっていた印刷技術 (ウィリアム・キャクストンはすでに1476年に印刷技術をイングランドに導入している) を用いて印刷されて普及していったのに伴い、英語はこのような言語であるという定義とともに人々の間に浸透したのである。さらに、Milroy and Milroy (1991, pp.35) は当時の政治主導の言語統一化の試みを次のように評価している。“They seem to have been successful in codifying a set of conventions appropriate for the written language – conventions which have not changed greatly since that time.” 18世期の英語統一化、あるいは標準語化の試みは、少なくとも書き言葉においては今に至るまでほとんど変化が起こっていないことを考えれば、成功だったと言えるのだろう。

こうして、いったんコード化された言語、つまり辞典や文法書は、その言語を使う人々が手本とするものになり、さらにはその言語の学習者が求める規範となった。今やイギリスの経済発展に大きく寄与している英語教育産業<sup>1</sup> (British Council, 2013) は、英語ネイティブが提示する規範を求める学習者によって支えられているとも言える<sup>1</sup>。

以上、辞典と文法書を、規範主義的なものとして同様に扱ったが、ここで必ずしも辞典と文法書ではその求められる役割が同じではないという考え方もあることに触れておく。例えば、南出 (1988) は、辞典 (辞書<sup>ii</sup>) と文法書では、その規範文法的アプローチに対して評価が分かれるとして、「辞書は規範を求めるというuserのニーズを反映させようとする方向に向かうのに対して、文法は言語平等説を原則とする言語教育とより密接に結び付くので教育現場では規範といった概念と両立し難く……記述主義という言語学の基本知念を反映させ易い」(p. 12) と述べている。

しかし、実は言語教育の場においても、様々な変種を拒否する姿勢は強いのではないだろうか。それどころか、教育の現場でこそ規範を遵守する傾向はより強いかもしれない。そのことはWorld Englishes やEnglish as a Lingua Franca (ELF)、English as an international language (EIL) の概念を英語教育に持ち込もうとしても、なかなか難しいことが示唆している。特に大きな障壁の一つにassessmentが絡んでいることは、多くの研究者が認めている (e.g., Galloway & Rose, 2015; Jenkins, 2014; Mackenzie, 2013)。つまり、教育者が標準英語以外の変種を認めようという姿勢を持って英語教育にあたったとしても、成績評価や試験の際に困難に直面するのである。例えば、評価を受ける側が、規範的文法と異なる単語の使い方をしたり (例: discuss + 目的語でなく、discuss about+目的語とした場合)、多重否定文 (例: I don't have no money.) を作ったりした場合には、たとえそれが intelligible (理解可能で伝えたいことが通じる状態) ではあっても、正解とはし難い。従って、南出 (1988) は、文法書よりも辞書に関して「使う側には規範を求める風潮が強い」(p.4) としたが、その理由が、言語平等説が言語教育では原則とされているからである、という主張に強い説得力はないと言える<sup>iii</sup>。

文法書であれ、辞典であれ、学習者は、そこに「ネイティブの英語 = 正しい英語のモデル」を求めてページを繰るのである。

### 3. コロケーションとコロケーションの辞書

英語のコロケーション辞典に載っている用法を紹介し検証する前に、コロケーションとは何か、そしてコロケーションの辞書とはどのようなものかについて簡単に触れる。

#### 3.1 コロケーションとは

*Oxford Collocations Dictionary for Students of English*の第2版 (2009) は、コロケーションの定義から始まる。“Collocation is the way words combine in a language to produce natural-sounding speech and writing” (McIntosh, Francis & Poole, 2009, v). コロケーションが成立するときには、それは「自然な」表現なのだ、という主張でもある。また、研究社の『新編 英語活用大辞典』(1995) では「慣用的な語と語の結合」(a habitual association

of words) を「連語」(collocation) と定義している。この2つをまとめたような解説が、小学館の『プログレッシブ 英語コロケーション辞典』(2012)の前書きに見つかる。「語と語の結びつきには相性があり、そのような「語と語の慣習的な結びつき」はコロケーション(連語)と呼ばれます。ネイティブスピーカーに近い自然な英語を使うためには、コロケーションの知識がとて重要です」(塚本、2012)。

コロケーションの例には、特定の形容詞と名詞、名詞と動詞、形容詞と副詞といった組み合わせがある。例えば、日本語で「強い雨」と言うが、英語では strong rainとは言わず、heavy rainと言う(形容詞+名詞のコロケーション)。日本語では「風呂に入る」というが、英語では take a bath という表現になる。さらに、日本語では「とても正しい」と言えるが、英語では very rightという副詞+形容詞のコロケーションはない(なぜなら、英語では right(正しい)という形容詞にはその程度を表す修飾語がつけられないからだ)、と、そのルールが異なる。

以上のように、何が「自然な」コロケーションであるか、またどの語とどの語の結びつきがコロケーションとして成立するのかは、言語ごとに違う。そこで、ネイティブのように「自然な」英語を使いこなせない英語学習者が、ネイティブらしい語の使い方を探し、身につけるためには、コロケーションを意識的に習得しなければならず、その学習の助けになるのがコロケーションの辞典なのである。

### 3.2 コロケーションの辞書の特徴

語の定義が中心の辞典と異なり、コロケーションの辞典は、まさにそのコロケーションの例示が中心である。『研究社 新編英和活用大辞典』(1995)は、一般の英和辞典との違いを、「名詞・動詞・形容詞が、どのような語と結合してコロケーション(連語)をなすかを示した辞典」である点だ(v)、としている。そして、この『新編英和活用大辞典』の特徴とは、重要とみなされた英単語 16,000 語の活用方法を約 380,000 になる使い方・用例でまとめた、英文を「書くための」辞典であることだとし、またそれに加えて書き手がより「自然な英語」の文を作れるように、それぞれの単語と他の語とのコロケーションを、具体的な用例をあげて解説していることだと提唱している(LogoVista, 2021)。

収録している単語の定義でなく、重要単語のコロケーションの具体的な用例をあげてその使い方の解説をする辞典は、その性質上、記述的な側面も持つ。しかし、学習者が辞典を参照する際には、そこに正解を求めているときである。そう捉えると、記述的な機能よりも従来の辞典同様の規範的機能を果たしているとも考えられる。

#### 4. 分析の対象と方法

以下、コロケーションの辞典を1つ例にとり、woman/man, wife/husbandの2対の名詞に対し、どのような形容詞や動詞がコロケートすると記載されているかを参照する。使用するのは*Oxford Collocations Dictionary for Students of English*, 2<sup>nd</sup> edition. (2009)である。Woman/man, wife/husbandのように名詞に焦点を当てたのは、“[w]hen framing their ideas, people generally start from a noun” (McIntosh, Francis & Poole, 2009, v) とあるように、コロケーション辞典を使う側の視点としてはまず名詞から検索することが一般的であると考えられるためである。以下の分析においては、辞典に載っている例文やアメリカ英語・イギリス英語などの特記事項は取り上げない。なお、コロケーションする語で似た意味の語は | extraordinary, remarkable | や | single, unattached, unmarried | のようにまとめられており、そのまともりは “category collocation” (McIntosh, Francis & Poole, 2009, vii) として紹介されている。

##### 4.1 *Oxford Collocations Dictionary for Students of English*, 2<sup>nd</sup> edition. (2009).

本稿で分析対象とする *Oxford Collocations Dictionary for Students of English*, 2<sup>nd</sup> edition (2009) は、タイトル通り、英語学習者向けの辞典である (以下、*Oxford Collocation Dictionary* とする)。約9,000語の見出しを載せており、コロケーションは *Oxford English Corpus* を基に抽出し並べてある。ここでのコーパスとは、電子情報として存在する書き言葉及び話し言葉の集合であり、“[i]t provides us with the evidence of how language is used in real situation, which we use as the basis for our dictionary entries” (McIntosh, Francis & Poole, 2009, vi)、つまり、この辞書に収録した単語について

の情報を載せるために使った、実際にどのように言葉が使われているかの証拠の役目を果たしている。また、Oxford English Corpus は、最新のテキストを元にした、およそ20億の単語からなるデータベースであり、その単語がどう使われているのか (word behaviour) について可能な限り正確な情報を提供している (McIntosh, Francis & Poole, 2009, vi) とされる。

また、編集者たちが気を配ったのは、学習者が英語を書く際に役立つ辞典を作るという点であり、そのために最も重要視されたのが、過度に専門的にならない程度の、エッセイやレポートを書くための “moderately formal language” (比較的フォーマルな言語) であり、続いて、法律や医学などのいくつかの専門分野で重要とされるコロケーションや、感情・人間関係を表すコロケーション、そして話し言葉やインターネット上でのやりとりに頻繁に使われるコロケーションとなっている (McIntosh, Francis & Poole, 2009, vi)。

英語で執筆され、英国の最大手出版社の一つである Oxford University Press から出版されている本書は、世界中の英語学習者が、より「ネイティブスピーカーに近い自然な英語を使うため」(塚本、2012) に参照する辞典の1つであると言える。

## 5. Woman/man とコロケートする形容詞

*Oxford Collocations Dictionary* (2009) で woman と man の項目に掲載されているコロケートする形容詞を列挙し、その傾向を分析する。

### 5.1 形容詞 + woman/man の掲載語

*Oxford Collocations Dictionary* (2009) における category collocation (カテゴリー) でまとめられている単位ごとに、掲載されている順に並べたのが以下の表である。左側に woman のエントリーで形容詞のついたもの (McIntosh, Francis & Poole, 2009, p. 944)、右側に man のエントリーで形容詞がついたもの (McIntosh, Francis & Poole, 2009, p. 500, Definition 1) のものを載せている。一見して、形容詞 + woman の方が、形容詞 + man よりも掲載されている語数もカテゴリーも少ないことが見て取れる。

表1 形容詞 + woman と 形容詞 + man における形容詞の掲載順

カテゴリー	形容詞 + woman	形容詞 + man
1	young	elderly, middle-aged, old, older, young
2	middle-aged	grown
3	elderly, old, older	40-year-old etc.
4	married	attractive, good-looking, handsome
5	single, unattached, unmarried	ugly
6	widowed	short, tall
7	divorced	lanky, thin, wiry
8	pregnant	fat, portly, stocky, stout
9	childless	big, burly, heavy-set, muscular, well-built
10	menopausal, post-menopausal	little
11	business (usually <i>businesswoman</i> ), career, professional, working	black, white
12	average, ordinary	dark, dark-haired, fair-haired, light-haired
13	extraordinary, remarkable	bearded
14	attractive, beautiful, good-looking, handsome, pretty	bald, balding
15	desirable	blind
16	plain, ugly	cloaked, hooded, masked, suited, uniformed
17	well-dressed	well-dressed
18	educated, intelligent, smart	naked
19	powerful, strong	armed, unarmed
20	successful	able-bodied
21	independent, modern	sick, wounded
22	motherly	dead, drowning, dying
23	decent, good, kind, nice	homeless
24	evil, wicked	intelligent, wise
25	hysterical	educated
26	battered	great
27	the other	brave
28	N/A	charming, fine, good, kind, nice

カテゴリー	形容詞 + woman	形容詞 + man
29	N/A	honest
30	N/A	honourable/honorable
31	N/A	proud
32	N/A	quiet, soft-spoken
33	N/A	macho, manly
34	N/A	bad, horrible
35	N/A	arrogant
36	N/A	mysterious, strange
37	N/A	hard, violent
38	N/A	drunken
39	N/A	married, single
40	N/A	family
41	N/A	bisexual, gay, heterosexual, homosexual, straight
42	N/A	professional
43	N/A	lucky
44	N/A	poor
45	N/A	rich, wealthy
46	N/A	betting, gambling
47	N/A	self-made
48	N/A	right-hand
49	N/A	leading
50	N/A	innocent
51	N/A	free
52	N/A	wanted
53	N/A	condemned

## 5.2 形容詞 + woman/man から見られる傾向：共通点と相違点

形容詞 + woman と形容詞 + man のパターンで共通している点は、まず年齢に関する形容詞から紹介されていることである。しかし、そこから先は相違点ばかりが目立つ。

年齢に関する形容詞の並び方が woman の前につく場合には young | mid-



dle aged | elderly, old, older と年齢が下の方順から、manの場合には elderly, middle-aged, old, older, young と年齢が上の方の順から、と逆になっている。カテゴリーの分類も + woman の方が細かく、女性に対してはその人がどのくらいの年齢であるかが重要な区分となることを示唆している。

形容詞+ woman では、年齢の次 (カテゴリー 4-7) には、married | single, unattached, unmarried | widowed | divorcedと、配偶者がいるか否かの情報が列挙され、そこにはpregnant やchildless といった、妊娠出産に関する情報も続く。一方で、同様の情報は、+ man のコロケーションではカテゴリーでいうと39番目にならないと出てこず、しかも married と single は同じカテゴリーに分類されている。

形容詞+ woman で目立つ項目の一つが11番目のbusiness (usually *businesswoman*), career, professional, working である。Professional 以外は男性を形容する単語として見当たらない。これは、仕事をする女性はいまだにmarked (有標) される存在であり、つまりは規範から逸脱していると見られている一方、男性は仕事をしている状態が unmarked (無標) でありごく一般的な規範であることを示していると言える。

逆に、形容詞 + man にはあって形容詞+womanにないもの、たとえばカテゴリー 6-9の体型を表す表現 (short, tall | lanky, thin, wiry | fat, portly, stocky, stout | big, burly, heavy-set, muscular, well-built) や、カテゴリー 12-14の頭髪・髭に関するもの (dark, dark-haired, fair-haired, light-haired | bearded | bald, balding)、さらにカテゴリー 41の性的指向の表現 bisexual, gay, heterosexual, homosexual, straight が目立つ。

社会的ステータスに関係する rich, wealthy, poor, self-made という形容詞も + man の方にだけ収録されている。健全な身体かどうか (able-bodied | sick, wounded) が取り沙汰されるのも男性のみなのは、それによって仕事ができるかどうかが大きく左右されるからであろうか。

また、トラブルメーカーとなりそうな要素も男性の方に多く、bad, horrible | hard, violent | drunken | betting, gambling | wanted | condemned といった形容詞が並ぶ。加えて、男性を修飾する表現には人間の内面を描く表現も多く使われている (honest, honorouable/honorable, proud, arrogant, mysteriousなど)。

以上からは、「自然な英語」の世界観においては、女性を判断するにあた

って、その人の年齢及び未婚・既婚のステータスや子供のある無しが重要視されるのに対し、男性を判断する際には、その人の容姿（特に髪と体型）および仕事をしているのを前提とした上でどれだけ成功しているのかが重要視され、さらに、どのような性的指向があり、どのような性格をしている人なのかまでが問われる様子が伺われる。英語学習者が女性あるいは男性を描写しようとして辞典を開いた時に、女性に関して表現できる形容詞が男性を表現する形容詞と比較して数的に限られているだけでなく、女性の社会的な活動範囲が狭く社会におけるインパクトも小さいことが前提とされている様が見えてくると言える。

## 6. Wife/husbandとコロケートする形容詞

*Oxford Collocations Dictionary* (2009) でwife (McIntosh, Francis & Poole, 2009, p. 939) とhusband (McIntosh, Francis & Poole, 2009, p. 425) の項目に掲載されているコロケートする形容詞を列挙し、その傾向を分析する。

### 6.1 形容詞 + wife/husbandの掲載語

5.1同様に*Oxford Collocations Dictionary* (2009) における category collocation でまとめられている単位ごとに、掲載されている順に形容詞を次の表に並べた。形容詞 + woman/man の際と逆で、女性の wifeの方につく形容詞の方が男性のhusbandにつく形容詞よりも多く挙げられていることがひと目で分かる。

### 6.2 形容詞 + wife/husbandから見られる傾向：共通点と相違点

最初の5つのカテゴリーのうち3つは共通している。「将来の、決まった」という意味でのfuture (+husbandは prospective という形容詞も)、「以前の」という意味での former、そして何番目の、という意味での first, second, etc. である。一方で、+ wife では一番最初のカテゴリーで紹介されている new という形容詞は + husband では6番目、+ wife で5番目の deserted (捨てられた) という形容詞は + husband のコロケートとしてはそもそも*Oxford Collocations Dictionary* (2009) に掲載されていない。以降、+ wife と + husband では差異が目立つようになる。

表2 形容詞 + wife と 形容詞 + husband における形容詞の掲載順

カテゴリー	形容詞 + wife	形容詞 + husband
1	new	future, prospective
2	future	suitable
3	former (also ex-wife)	former (also ex-husband)
4	first, second, etc.	dead, deceased, late
5	deserted	first, second, etc.
6	divorced, estranged	new
7	common-law	devoted, good, loving, wonderful
8	dead, late	beloved
9	dependent	faithful
10	young	cheating, errant, unfaithful
11	pregnant	absent, estranged
12	beloved, dear, good, wonderful	jealous
13	attractive, beautiful, charming, lovely	abusive, violent
14	dutiful, faithful, loving, loyal, supportive	house
15	long-suffering	N/A
16	unfaithful	N/A
17	jealous	N/A
18	domineering, nagging	N/A
19	battered	N/A
20	trophy	N/A

例えば、+ wife で6番目のカテゴリーに入っている divorced, estranged の divorced (離婚した、離縁された) は + husband では収録されていない。離婚・離縁は、結婚している1組の夫婦がした場合、妻と夫の両方が等しく divorced した状態になるにもかかわらず、相手と積極的に離婚をするのは男性の方で、女性は夫に離婚をされる側、という解釈が可能である。同様に、+ wife のカテゴリー7にある common-law (内縁の) という形容詞に関しても、common-law wife があればそこに必然的に common-law husband が存在しているはずなのに、common-law husband というコロケーションは *Oxford Collocation Dictionary* (2009) には掲載されていない。このことは、事実婚の関係において妻であるという立場が意味を持つのは女性の側の事情

であり、男性の側には夫であるという意識は薄いのではないかという疑念を抱かせる。

さらに、young や attractive, beautiful, charming, lovely といった見た目の美しさや魅力を表す修飾語が使われるのは + wife の場合に限られている。Dependent (扶養を受けている、依存している) も +wife のみのコロケーションであり、夫が妻を経済的に扶養するという従来の夫婦関係が描かれていると言える。

結婚相手にとって忠実な存在として描かれるコロケーションのカテゴリーとして、+ wife には dutiful, faithful, loving, loyal, supportive が並び、似たようなカテゴリーを + husband で探すと devoted, good, loving, wonderful が並ぶ。しかし、この2つの語群には次のような違いがある。Dutiful や supportive, loyal といった、従属関係で言えば従う立場の方を描写する形容詞が + wife とコロケートするということは、夫に対して忠実に従う妻の立場が「自然な英語」として頻出するということを示すと考えられる。その一方で夫の方が妻に従うという姿はない。また、男性の浮気の方が女性の浮気より一般的であることを示すためか、+ husband の10番目のカテゴリーに cheating, errant, unfaithful (浮気をしている、不倫をしている) と3つの形容詞が挙げられているのに対し、+ wife では16番目のカテゴリーに unfaithful の一つの形容詞があるのみである。

補完的な意味合いを持つ形容詞としては、+ wife に battered (殴られた、虐待された)、+ husband に abusive, violent (乱暴な、暴力を振るう) というのがある。いわゆる家庭内暴力において、暴力を振るうのは夫、振られるのは妻、とう立場が提示されている。妻から夫への攻撃といえればせいぜい domineering (威圧的な、傲慢な)、nagging (口やかましい) くらいである。

それぞれ最後のカテゴリーで紹介されているところからして、使用頻度としては少ないのであろうが、+ wife のみにしか見られない表現として trophy wife が、そして + husband のみにしか見られない表現として house husband も紹介されている。それぞれ、trophy wife は “an attractive younger wife” (魅力的な年下の妻) (McIntosh, Francis & Poole, 2009, p.939)、house husband は “a man who stays at home to care for children, cook, clean etc. while his partner works” (配偶者が仕事をしている間に、家にいて子供の世話をしたり、料理や掃除をしたりする男性) (McIntosh, Francis & Poole,

2009, p.425) と定義されている。ここから分かることは、夫が自分の富や成功の証としていわばトロフィーのように世間に見せつけるために手に入れる trophy wife はあっても、その逆のパターン、つまり、妻の方が社会的地位と富があり見せびらかすために自分より若く容姿端麗な男性と結婚し彼を trophy husband と呼ぶ、ということはない、そして house + wife (主婦) は当たり前な存在であり housewife という単語が既に一般的に使われているのに対し、house husband (主夫) は一般的でないが故に marked な状態として辞典に定義と共に載せられる、という非対称的な男女のあり方である。

本来、結婚が対等な二人の人間の間の結びつきであれば、ここまでコロケートする形容詞が異ならなくて良いはずである。しかし、それにもかかわらずこれだけ wife とコロケートする形容詞と husband とコロケートする形容詞が異なるということを辞典が示しているということは、英語圏社会における妻と夫の立場や規範、世間の期待がそれだけ異なるということを示しているとも言える。

## 7. 結論

以上、英語学習者にとってはこれ以上ないほどの権威とも言える、英国の大手出版社 Oxford University Press から出版された *Oxford collocations dictionary for students of English*, 2<sup>nd</sup> edition (2009) より、woman/man そして wife/husband にそれぞれどのような形容詞がコロケートするのが自然な英語であり学習者が知っておくべきものだと提示されているのかを検証した。対象としたテキストはあくまで辞典のエントリーであり、それが本当の英語の使われ方を100%反映していない可能性はある。しかし、学習者にとってはコロケーションの辞典は、よりネイティブらしい、自然でオーセンティックな表現を身につけるための重要なリソースであり、お手本である。その辞典の編集者が「ネイティブスピーカーに近い自然な英語を使うため」には、コロケーションの知識がとても重要です」(『プログレッシブ英語コロケーション』、塚本、2012) と提唱し、そこに収容されている表現こそが “natural-sounding speech and writing” (McIntosh, Francis & Poole, 2009, v) であると言い切っているのだから、ますます「これこそが本当の英語」と学習者が思い込んでも無理はないだろう。

しかし、辞典を使うという行為は、外国語として英語を学ぶ英語学習者にとっては、メタ言語的な学びにつなげるための良い機会も提示してくれるものでもある。英語ネイティブ・スピーカーにしてみれば、あまりに自然すぎて疑問にも思わなくなっているコロケーションが、学習者には新たに覚えなくてはならないものとして明示されているわけであるから、辞典に載っている表現を鵜呑みにして使うのではなく、そもそもなぜそれが「自然な」英語として提示されているのかを立ち止まって考えることもできるのである。そして、そう考えるのであれば、コロケーションの辞典は、英語学習者が、英語という言語に内包された英語圏文化・社会の価値観やイデオロギーについて批判的に見つめるための材料を提供してくれるものであると捉えることも可能である。辞典は、規範を求めてページをめくるためのみにあるのではなく、そこからその言語を支える文化や社会を知るためにも使えるのである。

なお、本稿では英語圏で出版され世界中の英語学習者を読者層とした *Oxford collocations dictionary for students of English*, 2<sup>nd</sup> edition (McIntosh, Francis & Poole, 2009) を分析対象とした。今後、日本で日本人英語学習者向けに出版されている『研究社新編英和活用大辞典』(研究社、1995) や塚本倫久. (2012). 『プログレッシブ 英語コロケーション辞典』(塚本、2012) も分析対象のテキストに含め、さらに多くの男女の対語のコロケーションを形容詞以外にも広げて調査することで、さらに多角的な辞典におけるジェンダー研究が期待できる。

---

<sup>i</sup> 2013年のブリティッシュ・カウンシルの発表によると、イギリスの英語教育業界は2000年以降134%の成長率を示し、年20億ポンド(2020年9月13日の為替レートでおおよそ2717億円)規模の市場であり、さらに2020年までにはこれが年30億ポンドの市場になるであろうと予測されている(British Council, 2013, p.14)。同時に、イギリスのトップ5の出版社である Pearson, Reed Elsevier, Informa, Oxford University Press, Cambridge University Press を合わせると、世界中の出版業界のおおよそ4分の1に迫る133億9千万円ユーロ(2020年9月13日の為替レートでおおよそ1兆6840億円)の売り上げがあることも報告されている。その出版物全てが英語学習者向けの辞書や教科書というわけではないが、標準イギリス英語という1つの規範である英語に世界各地の人が触れる機会は多い。

<sup>ii</sup> 英語の dictionary に対し、日本語では「辞典」「辞書」の二つの表記が可能である。本稿では「辞典」を優先して使うが、南出は「辞書」の表記を使用している。

<sup>iii</sup> Widdowsonなどは、すでに1990年代に、英語は国際語でありネイティブが取り仕切ることできるネイティブだけの所有物ではない、と次のように主張している。“How English develops in the world is no business whatever of native speakers of England, the United States or anywhere else. They have no say in the matter, no right to intervene or pass judgement. [...] The very fact that English is an international language means that no nation can have custody over it. [...] It is not a possession which they lease out to others, while retaining the freehold. Other people actually own it” (Widdowson, 1994, p. 385). その後2000年に入ってから、World EnglishesやELF, EILについての研究が盛んになり出版物は急激に増えた (Galloway & Rose, 2015) が、実際に英語教育の現場にどう取り入れるかとなると教員育成、教材作成、テストなどの評価方法等課題が多い。Galloway and Rose (2015) もいくつか解決策は提示しているが、少なくとも今の日本の入学試験の現状を考えると、すぐに実現できるとは思えない。

### 引用文献

British Council. (2013). *The English effect: The impact of English, what it's worth to the UK and why it matters to the world.*

<https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/english-effect-report-v2.pdf>

Galloway, N. & Rose, H. (2015). *Introducing global Englishes*. Routledge.

Graddol, D., Leith, D., & Swann, J. (Eds.). (2006). *Changing English*. Routledge.

Jenkins, J. (2014). *Global Englishes* (3rd ed.). Routledge.

研究社. (1995). 『研究社新編英和活用大辞典』

LogoVista. (2021). LogoVista電子辞典シリーズ『新編英和活用大辞典』

[https://www.logovista.co.jp/LVERP/shop/ItemDetail?contents\\_code=LVDKQ02010](https://www.logovista.co.jp/LVERP/shop/ItemDetail?contents_code=LVDKQ02010)

- Longman Dictionary of Contemporary English. trophy wife.  
<https://www.ldoceonline.com/dictionary/trophy-wife>
- McIntosh, C., Francis, B., & Poole, R. (Eds.). (2009). *Oxford collocations dictionary for students of English* (2nd ed.). Oxford University Press.
- McIntosh, C., Francis, B., & Poole, R. (Eds.). (2009). Husband. In *Oxford collocations dictionary for students of English* (2nd ed, p.425).
- McIntosh, C., Francis, B., & Poole, R. (Eds.). (2009). Man. In *Oxford collocations dictionary for students of English* (2nd ed, p.500).
- McIntosh, C., Francis, B., & Poole, R. (Eds.). (2009). Wife. In *Oxford collocations dictionary for students of English* (2nd ed, p.939).
- McIntosh, C., Francis, B., & Poole, R. (Eds.). (2009). Woman. In *Oxford collocations dictionary for students of English* (2nd ed, p.944).
- Mackenzie, I. (2013). *English as a lingua franca*. Routledge.
- Milroy, J. & Milroy, L. (1991). *Authority in language: Investigating language prescription and standardization* (2nd ed.). Routledge.
- 南出康世. (1989). 「文法と辞書における規範主義：18世紀から健在まで」『近代英語研究』 5, 1-15. <https://doi.org/10.11220/mea1984.1989.1>
- 塚本倫久. (2012). 『プログレッシブ 英語コロケーション辞典』 東京: 小学館.
- Widdowson, H. (1994). 'The ownership of English.' *TESOL Quarterly*, 28(2), 377-380.